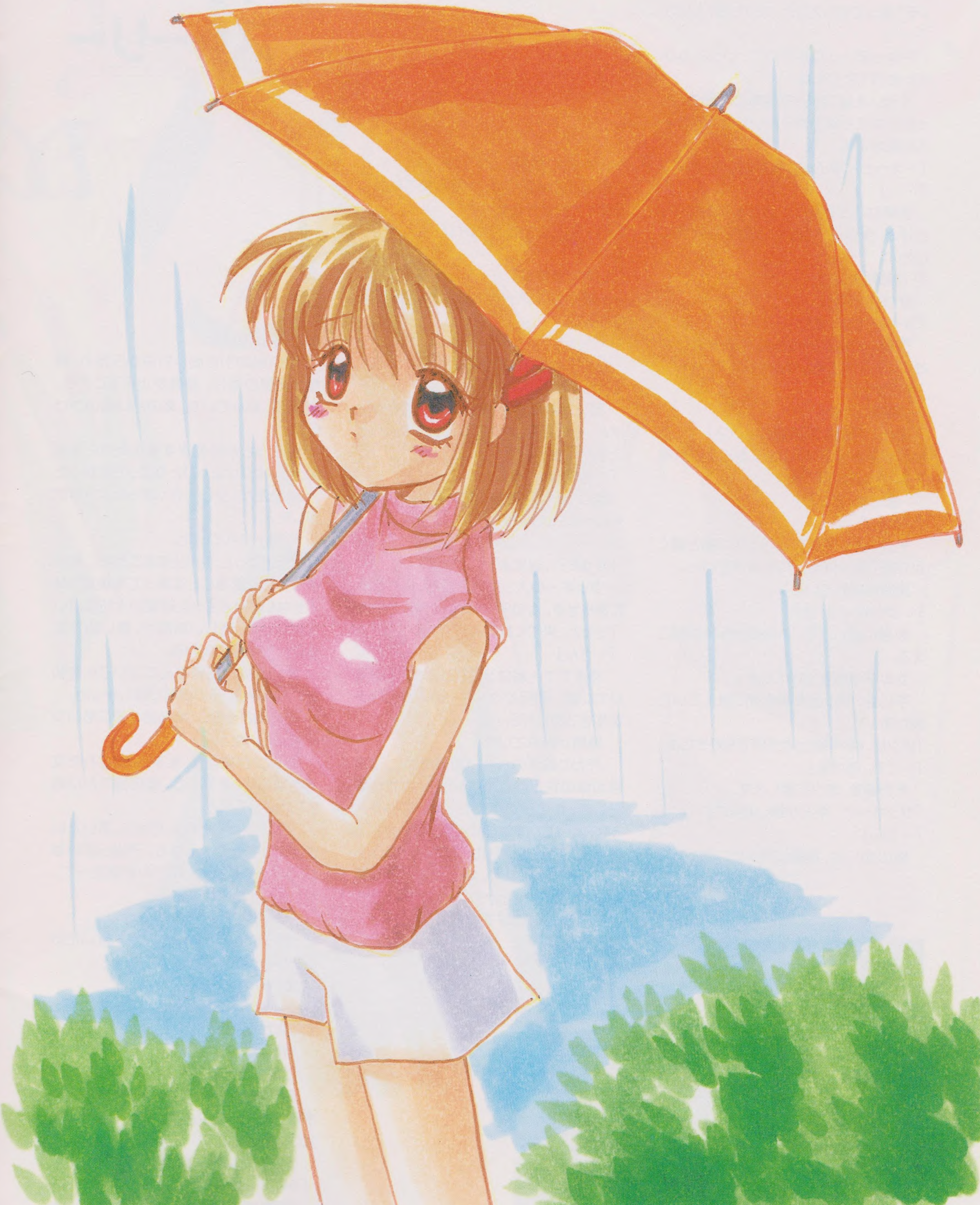
「Kanon」サイドストーリー

ユキの流れ落ちた街で

Txt：久弥直樹
Illustration：樋上いたる

　雨。
　雨が降っていた。
　オレンジ色の傘が、風に吹かれて頼りなく揺れていた。
　朝から降りはじめた雨は、時間と共にその勢いを増して、舗装された地面を激しく打ちつけていた。
「…やっぱり遅刻」
　溜息と共に呟いて、空を見上げる。
　7月に入ってから、ずっとこんな雨の日が続いていた。梅雨と呼ばれる季節を、素足にかかる雫で実感することができる。
「うぐぅ…冷たいよ…」
　雨の日にこの格好は失敗だったかもしれない…。約束の場所に立ってから、何度目かの溜息をついて、視線を地面に落とす。水たまりを覆い尽くす波紋に浮かぶ木の葉が、力なく左右に揺れていた。
「また、笑われるかな…」
　スカートは苦手だった。昔はそうでもなかったけど、今ではほとんど履くことがなくなっていた。そして、決まってあいつに、女の子らしくないと言われてからかわれることになる。
「だって、似合わないもん…」
　傘を揺らして、ビニールに浮かんだ水滴を払い落とす。風に押されて、黒い雲が流れ、代わりに、もっと黒い雲が空を覆い尽くす。そんな天気だった。
　今の心の中を映し出したような空模様…。また、溜息が口をついて出る。
「…遅いよ」
　約束の時間はすでに過ぎ去っていた。
　日曜日の昼下がり。いつのも場所で、あいつが来るのを待っている。そんな時間が、ずっと続いていた。少なくとも、昨日まではそうだった…。
「…やっぱり、まだ怒ってるのかな」
　喧嘩の原因は、些細なことだった。それこそ、思い出せないくらい些細な出来事…。
「…ボク、悪くないもん」
　だけど、それっきり。
　相変わらずの雨は、靄（もや）となって街並みをぼんやりと覆い隠す。まるで、思い出の中に、ひとりで取り残されてしまったような、そんな孤独な時間が流れていた。ひとりぼっちの自分が惨めで、悲しくて…。心の奥から雨雲が湧き出るように、瞳の奥から、もやもやとした何かが溢れ出てくる。
「…うぐぅ」
　俯くと雨粒のように涙がこぼれ落ちそうで、無理に空を見上げて笑おうとする。雨は、まだまだ消える気配さえなく、雨雲は空にどっかりと居座っていた。
「ふぁいとっ、だよ」
　空を見上げて、ふと呟く。
　友達の口癖を真似てみて、ほんのちょっとだけ笑えたような気がした。
　あいつが来たら、まず、待たされた文句を言おう。それから、商店街でたい焼きをおごって貰う。
　そう考えると、少しだけ元気も出てきた。
「……」
　時間が流れていた。
　バラバラと傘を叩く音が、雨音に混じって聞こえる。ボクのすぐ上から、そして、すぐ横からも…。
「…あれ?」
　気がつくと、すぐ側に小さな女の子が立っていた。
　ボクと同じオレンジ色の傘を斜めに差して、どこか不安げに空を見上げていた。
　寂しそうで、悲しそうで、そして、小さな希望に縋るような表情で…。
「どうしたの?」
　雨粒越しに、声をかける。
「……」
　重い空を見ていた時と全く同じ表情で、ボクの顔を見上げる女の子。
　傾いた傘から、雨の線が流れる。
　小さな手で傘を持って、もう片方の手で、ぎゅっと何かの包みを抱きかかえている。
「誰かを待ってるの?」
「……」
　こくん、と首を縦に動かす。
「だったら、ボクと同じだね」
「…ボク…?」
　少女が、首を傾げる。
「えっと、ボクって言ってるけど、女の子だからね」
「……」
「やっぱり、おかしいかな…?」
「……」
　ふるふる、と体ごと首を横に振る。



サイドストーリー

　一緒に揺れる傘が、どこか微笑ましかった。
「そう言ってもらえると、ボクも嬉しいよ」
「……」
「子供っぽいって言われて、いっつもからかわれてたからね」
　そういえば、昨日の喧嘩の原因も、きっかけはこんなつまらないことだったような気がする。
「…えっと、ごめんね。変な話しちゃって」
「……」
　余計なことを言っているような気もしたけど、女の子は微かに表情を綻ばせていた。
「…喧嘩したの？」
　ぽつり、と呟く。
「うーん、ちょっとね」
　予想していなかった女の子の問いかけに、ボクは苦笑しながら答える。
「キミは？」
「…喧嘩したの」
　僅かに見せた笑顔をしまい込んで、女の子が傘を被る。雨の音にかき消されそうな、力のない声だった。
「一緒だね、ボクと」
「…うん」
　それっきり無言で、じっと雨の音と遠くから届く街の雑踏に耳を傾けていた。
　時間が流れていた。
「…クッキー、好き？」
　雨音に混じって、すぐ横から声が聞こえる。
　女の子が顔を上げていた。
　手には、ずっと大事そうに抱えていた袋があった。
「ボクは、食べ物だったら何でも好きだよ」
「…これ、あげる」
　その袋を、ボクに差し出す。
「クッキー？　キミが焼いたの？」
「…うん」
　袋の中には、綺麗にラッピングされたクッキーが、数枚入っていた。
　形はどこか歪んで、市販の物でないことはすぐに分かった。
「それなら、1枚だけ貰うね」
「……」
「いただきます」
　一番小さなクッキーをつまんで、口に放り込む。
「……」
　女の子がじっとボクの顔を見ている。
「うん。おいしいよ」
　雨に濡れたクッキーは、少し苦かったけど、それでも、ボクが作るよりはずっと上手だった。
「…全部、あげる」
「嬉しいけど、でも、ボクの為に作ったんじゃないよね？」
「……」
「だったら、返すよ」
　クッキーの入った包み紙を、小さな手に握らせる。女の子は、俯いて黙っていた。
「きっと、来てくれるよ」
「…うん」
　今までで一番はっきりと、女の子が頷いていた。胸元でクッキーの入った包みを抱きしめながら…。
　時間が流れていた。
　代わり映えのしない雨の風景に、3本目の傘の花が開く。水色の傘。小さな傘。そして、女の子の表情が、笑っているような、泣いているような表情で満たされる。
　女の子と同じくらいの歳の男の子だった。息を切らせて、本当に傘を差しているのかどうか分からないような、そんなずぶ濡れの格好で、照れたようにぎこちなく笑っていた。
　思い出の引き出しの中から甦る、微かな記憶の断片。時間が止まることを、無邪気に願っていた、あの幼い日のかけら…。
　ぺこっとお辞儀をするふたりに手を振って、ボクはまたひとりぼっちになった。
　雨の音が、少し大きくなったような気がした。
　時間が流れていた。
　ずっとずっと、立ち止まることなく、時々、後ろを振り返ることはあっても後戻りはできない。過ぎ去った時間が大切な思い出になって、新しい時間が、思い出を彩る大切な瞬間に変わる。
　変わらない風景なんてないことを知っているから、今の時間が嬉しかった。
　雨の向こう側に、傘も差さずにあいつが立っていた。
　あいつが来たら、まず、待たされた文句を言おう。それから、商店街でたい焼きをおごって貰う。
　ずっと待っていたんだから、言いたいことだってたくさんある。子供っぽいなんて言って笑った、昨日の言葉だって、取り消してもらわないと。
「…うぐぅ」
　他にも、たくさん、たくさん、言いたいことがあった筈なのに…。
　それなのに…。
　あいつの顔を見ると、何も言葉が出てこなかった…。
　時間は、流れている。
　二度と止まることなく…。
　差し出した傘を受け取ったあの人の手は、思い出の中よりも、ずっとずっと、大きくて温かくて…。
　止まらない時間が、嬉しくて…。
「うぐぅ…遅いよっ」
　涙混じりの声で、あいつの頭をぽんと叩いていた。